

淨瑠璃名作集

中

緒言

本卷に收めたるもの左の七種、何れも流布の丸本によりて嚴密に校訂せり。

鎌倉三代記 享保三年正月二日

豊竹座

作者 紀海音

繪本 太功記 寛政十一年七月十二日

豊竹座

作者 近松やなぎ、近松湖水軒、近松千葉軒

近江源氏先陣館 明和六年十二月九日

竹本座

作者 近松半二、八民平七、松田才二、三好松洛、竹田新松、近松東南、竹本三郎兵衛

道成寺現在蛇鱗 寛保三年十月二日

豊竹座

作者 淺田一鳥、並木宗輔

傾城阿波の鳴門 明和五年六月朔日

竹本座

名代 近松門左衛門 作者 近松半二、八民平七、寺田兵藏、竹田文吉、竹本三郎兵衛

碁太平記白石噺

天明七年八月十二日

豊竹座

作者 烏亭焉馬、紀上太郎、容揚齋、焉烏旭、三津環

夏祭浪花鑑

延享二年七月十六日

竹本座

並木千柳 三好松洛、竹田小出雲

此時はじめて人形に帷衣の衣裳をきせはじめ。

大正三年十二月

校訂者 松山米太郎

浄瑠璃名作集中目録

鎌倉三代記

一—六

第一	忠臣標し揃へ	一
第二	鳥追大黒舞	二
第三	若狭の局道行	三
第四	まよひのすがたゑ	四
第五		四
發端		四九
六月朔日の段		五二

繪本太功記

四九—一四〇

同二日の段	六〇
同三日の段	六六
同四日の段	七四
同五日の段	七七
同六日の段	八七
同七日の段	九二
同八日の段	一〇四
同九日の段	一〇八
同十日の段	一二三
同十一日の段	一二三
同十二日の段	一二五
同十三日の段	一三七

近江源氏先陣館

一四一—一三八

第一	一四二
第二	一四六

道成寺現在蛇鱗

三三九—三三三

第三	道行旅路の濡衣	一七三
第四	道行旅路の濡衣	一七三
第五	道行旅路の濡衣	一七三
第六	道行旅路の濡衣	一七三
第七	道行旅路の濡衣	一七三
第八	道行旅路の濡衣	一七三
第九	道行旅路の濡衣	一七三
第一	道行塗分轄	二六五
第二	道行塗分轄	二六五
第三	道行塗分轄	二六五
第四	清姫日高川之段	三〇七
第五	清姫日高川之段	三〇七

傾城阿波の鳴門

三三三—三四四

今様亂拍子	三三六	
第一	傾城阿波の鳴門	三三三
第二	傾城阿波の鳴門	三三三
第三	傾城阿波の鳴門	三三三
第四	傾城阿波の鳴門	三三三
第五	傾城阿波の鳴門	三三三
第六	傾城阿波の鳴門	三三三
第七	道行思ひの富士	三九九
第八	道行思ひの富士	三九九
第九	道行思ひの富士	三九九
第十	道行思ひの富士	三九九
姉は宮ぎのぶ	四三五—四五六	
妹はしのぶ	四三五—四五六	
第一	姉は宮ぎのぶ	四三五

第二	殿の詫意を卷込んだ おやま繪の拜領物	五八七
第一	色の水上汲分た 御鯛茶屋の鹽竈	五五七
第十一	夏祭浪花鑑	五七四
第十	道行いほぬいろぎぬ	五五三
第九	道行いほぬいろぎぬ	五五一
第八	道行いほぬいろぎぬ	五三七
第七	道行いほぬいろぎぬ	五〇〇
第六	道行いほぬいろぎぬ	四八九
第五	道行いほぬいろぎぬ	四七三
第四	道行いほぬいろぎぬ	四六五
第三	道行いほぬいろぎぬ	四四六
第二	道行いほぬいろぎぬ	四四〇

國七九郎兵衛
船三子
一才徳兵衛

五七七—六七四

第三	出入の數をつまぐつた 珠數三味の男作	六〇〇
第四	手代が戀を掘出した 浮牡丹の箱入娘	六三三
第五	道行妹背の走書	六三七
第六	男の意地を立ぬいた 焼鐵の女房作	六三三
第七	舅が欲を止兼た 紅粉絞の色入帷子	六四三
第八	友達に心を碎た 石割雪踏の合印	六四七
第九	親と子の縁を繫だ 貫さしの捕縄	六六三

目
錄

大正十五年八月二十日印
大正十五年八月二十三日發

刷 有朋堂文庫
行 淨琉璃名作集中 (非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼發行所

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

岡山製本